

(別添)

世界の人びとのための JICA 基金活用事業・業務完了報告書

1. 業務の概要：	
(1) 事業名	「ラオス：少数民族女性と障がい女性を支える製品づくり」(通常枠)
(2) 実施団体名	特定非営利活動法人 Support for Woman's Happiness
(3) 実施期間	2020 年 12 月 8 日～2021 年 12 月 7 日
(4) 実施国	ラオス
(5) 活動地域	ビエンチャン、ルアンパバーン、ルアンナムター
(6) 活動概要	
①活動の背景：	
Support for Woman's Happiness は 2017 年に障がい当事者のオファーを受けてラオスで障がい作業所ソンパオを障がい当事者と共にオープンした。当初は 5 名ほどにミシンの訓練を行う小さな作業所であったが、ラオス全土から訓練を受けたい障がい当事者が集まり、2020 年現在 28 名が所属している。作業の柱は 2 つあり、1 つは日本企業からオーダーを受けて小さな工場として稼働していくこと。もう 1 つはクオリティの高いラオス土産を作れるように訓練し、将来的に障がい当事者だけで製品づくりから販売まで担当できるようになること。その両方で障がい当事者の生活を支えるため、障がいがあっても最低賃金をもらえるような作業所づくりを目指している。日系企業から布ナプキン、手まり、巾着やノベルティなどのオーダーをもらえるようになり、1 つ目の柱を強化している。ラオス土産としては、ブランド FranMuan を立ち上げ 2019 年にレンテン族の生地を使い、ランチョンマット、クラッチバック、コースターなどをシリーズ化できた。またラオスのバタフライピーやマルベリーといった粉末を使った石けんづくりを障がい男性チームに指導することができた。今後はより独自性のある製品づくりを目指していきたい。	
②活動の目標：	
レンテン族の女性達の織り、染め、刺繍などの素材を活かして、障がい作業所ソンパオで製品づくりを実施する。これまでの既存の製品にはないデザインを確立し、ソンパオ独自の製品づくりを目指す。オリジナル製品を作り出すことで少数民族であるレンテン族女性達の手仕事を支え、障がい作業所ソンパオの仕事も生み出すことができる。今回の指導を通して村は外部からのオーダーに合わせる訓練、作業所は村とやりとりしながら納品期限内に製品を作り、販売する訓練を行う。一度目の実施の後、追加納品の訓練を行うと共に、次回作の提案へと繋げる。	

2. 業務実施結果：

（１）実施した内容＊

【実施内容①】各村での調査・指導

コロナ禍において日本人の現地渡航が難しくなったため、現地協力者であるラトサミーに地村への視察活動を依頼した。１回目の視察では機織りや刺繍の打ち合わせをする計画に合わせてレンテン族、タイルー族、ヤオ族、タイダム族などの村を訪問し、各村の取りまとめリーダーを決定。調査を担当するラトサミーと村の若手の女性たちとで Facebook や WhatsApp などの SNS の連絡先を交換。村によっては刺繍・機織りの担当女性がスマートホンを持っていないケースもあり、その場合は彼女の家族（夫・娘など）に連絡役を担当してもらえるように依頼を行う。ただしこの点に関しては今後も課題。携帯の通信が途絶えることがしばしばあり、連絡が遅れる村もあった。

訪問時期に合わせて自分たちの織りや刺繍をみてもらう準備がしており、スムーズに村の手仕事を確認できた。時期的に製作していないものもあるということで、定期的に確認作業を行う必要がある。仕上がった布をビエンチャンに郵送できるかの確認、自力で郵送できる場合はどこの町から配送するかと運送会社を確認し、運営可能かどうかを判断した。ビエンチャンまでの郵送が難しい村については、ルアンパバーンでラトサミーが一度受け取り、その後ビエンチャンの障がい作業所ソンパオに郵送することとなった。

各民族の村を訪問した際には、女性の手仕事につながるということもあり、大きな歓迎を受けた。レンテン、ヤオは実際に新しい製品作りが始まり、他の民族についても４月の訪問時には指導のための材料を持ち込んで製作に入っていく。

製品パーツが仕上がると回収しチェックした上で、ビエンチャンの障がい作業所ソンパオで製品化に進む。

ラオスがロックダウンに入り、移動することができない期間は、障がい作業所ソンパオでの製品作りと、今後必要になる材料の打ち合わせ、購入などに主に時間を割いた。

各村で製作したパーツを使つての新作作りが進み、前回の視察を効果的にものづくりに繋げることができた。

コロナワクチンを障がい作業所、調査担当のラトサミーが打ち各種証明書などの書類を取得することができた。その結果、６月にやっと現地視察に行くことができた。

【実施内容②】レンテン族

レンテン族の村では、まず事前に話し合っておいた刺繍パーツのチェックを行った。これは作業指導がなくてもある程度、村の中で作業を進めておくことができるパーツ製作になるが、１つを仕上げるのに何日くらいかかるかやそのスピードが平均的かといった項目が工賃計算の基礎となるため慎重に確認を進めた。小さい刺繍＝村のどの女性でも参加しやすいものから 大きな刺繍＝熟練した担い手の仕事 まで区分分けし工賃が正当かチェックを行った。次に新たに制作に挑戦するパーツ制作について話し合い、材料とサイズの指定、担当者を決め、約２ヶ月間で仕上がるように配分した。仕上がったパーツは一度、ラトサミーがチェックした後、障がい作業所ソンパオに配送し製品作りに入る。レンテン族の２村に関して

はこれまでも小物の製品オーダーを行っていたこともあり、新しいデザインについても円滑に進んだ。

レンテン族の村では、修正点を説明するとともに、うまくいったデザインの色違いを依頼。話し合いを重ねるにつれ、彼女たちの適応能力が高まっているのを感じた。各村での暮らしの調査も行い、やはりコロナ禍での影響が大きいことが判明している。レンテン族は冬の間の農作業が少なく、布作りや刺繍などのものづくりが女性の収入を支える軸になるため、冬場の仕事量を一定保つための話し合いを進めた。

【実施内容③】ヤオ族

ヤオ族は機織りをしておらず、手織り生地がない。生地の調達を任せると市場でベトナムや中国のコットンを買ってきてしまう可能性が高い。よってヤオの村への訪問より前にレンテンの村へいき、レンテンの機織り生地を反物で購入し、ヤオの人々の刺繍のためにカットする流れをラトサミーと設定した。

ヤオ族はあまり社会化されていないため、指導が難しい。メモを取るだけでは十分でないので、生地を担当者ごとにカットして渡し、刺繍する範囲をペンで囲み繰り返し指導を行った。指示通りに作業が進むかは慎重に確認する必要がある。また、携帯電話を持つ女性が少なく、村とのやりとりに時間を要す。約2ヶ月で作業を終えるように指示してあるが、予定通りに進まない・作業に間違いが出ることも想定内として進めた。仕上がった製品パーツをルアンパバーンのラトサミーのところへ郵送する指導も行った。生活の様子や、コロナ後の影響についての聞き取りも行った。

繰り返し指導を行っているが、サイズ通りの刺繍パーツづくりに間違いが多く、2割ほどは製品として活用することが難しかった。指導方法について話し合い、型紙を複数セット作って持ち込むこと・作業所内での検品のルールを明確にすることなどを確認し、実行。

【実施内容④】タイダム族・タイデン族・タイルー族

タイダム族の村では、無理なく機織り・刺繍できる素材を頼んでおいたものを確認。こういったチャレンジが可能かリーダーの女性陣と話し合いを行った。まずは既存のものを繰り返し作り、納期に合わせる練習から始めることとした。

タイルーの村では染め、シンプルな生地の織りについて調査を行った。比較的、外部とのやりとりに慣れている村ではあるが、協働事業としてどんな製品作りができるかは繰り返し話し合う必要がある。暮らしについて、材料についての調査は完了。タイデエンの村では、国営のハンディクラフトセンターを訪問。担当スタッフからセンターの運営や村での役割について話を聞いた。センターがあることで値崩れすることなく、村人に仕事を配分することができているようだった。今後は、このハンディクラフトセンターを支援する形で、製品のオーダーを進めていきたい。

トライアル的にはじめたタイルー族の手織ラグ、タイダムの頭巾をアレンジした暖簾 は好評で継続的に製作指導を行う。

【実施内容⑤】その他の民族からの依頼

モン、カム族からの打診もあり、回れる範囲での生活調査と手仕事の調査を行い、民族間の

連携ができないか検討に入った。

布製品以外にも葛やシナの編みパーツも製作できる村が点在しており、こういった製品パーツも障がい作業所ソンパオと連携して製品化を進めることができる可能性がある。調査入村では事前に頼んであったパーツを回収し、一般製品にできるかどうか試作。

【実施内容⑥】障がい作業所ソンパオでの指導

ラオスではロックダウンが強化され、移動がほぼ不可能な状況下での活動期間がほとんどであった。そのため安全を優先し作業所、村ともに持ち場を移動せず、ルアンパバーンのラトサミーが遠隔で通訳に入りながら指導を進めた。村に依頼し順調に製作が進んだ製品パーツは郵送で障がい作業所ソンパオで受け取り、製品づくりにつなげた。製品は日本に配送してもらい、クオリティをチェック。ラオス国内のお土産品店に問題なく並べることができるクオリティとなった。

デザインのパーツも半分ほどは製品化が終わり、マーケティングのチェックに入った。ラオスは現在ロックダウンで店舗運営が不可能であるため、日本に取り寄せ多くの方に見ていただくことでフィードバックを得ている。

コロナワクチンは障がい作業所ソンパオでは接種完了しているが、山間部の少数民族の村では接種が進んでおらず、まだ厳しい移動制限が続くと想定される。

稲刈りの忙しい時期の後、染め、織の充実する時期がくるため、少数民族村には仕事の依頼を途切れる事なく行えるように留意する。障がい作業所ソンパオでは継続的にミシンチームが稼働できることを優先し、うち3名はこの1年で作業レベルが上がったため、来季は次の3名も基礎的な訓練に加わることができるように組み込んでいく。

通常時に製作できていたデザインに加えて、村とコラボしたトートバッグ、リボンにヤオ刺繍をあしらったバッグ、レンテン新柄刺繍のバッグシリーズなどが仕上がりチェックが済んでいる。刺繍入りのパンツやスカートは仕上がっているものの、配送が完了しておらず次回フィードバックとなるが、ミシンチームの意欲が高く次の製品を作りたいという声が絶えず上がっていることが喜ばしい。

（２）実施成果：

日本チームへの製品提供が継続でできるという見込みが立ち、少数民族村では大変喜ばれている。達成に向けて「こうしてはどうか」という意見も出るようになった。ラオスは社会主義で全体的に大人しい人が多いため、こうした活発な動きが自発的に出るのは運営側としても嬉しい限りだ。この自発性を次世代のリーダーに繋げていきたい。

村において１枚の刺繍や機織りにどれくらいの価値があるかを改めて考える機会になり、それぞれが無理せずに何枚仕上げられるか、も検討をしてもらった。これは生産者が弱者にならない仕組みと一緒に考える機会になり、有り難かった。

そしてラオスではこういった少数民族の良さや個性を知ってもらう機会が少ない。知らなければ文化を守ることも難しくなるので、力を入れて周知していくためにも良い製品を作り世に出していくことで一助になればと思う。御殿場で開催した「赤のラオス展」には駐日ラオス大使・駐米ラオス大使をお呼びし、障がい作業所ソンパオと少数民族村での取り組みについてもご紹介することができた。お二人とも熱心に写真をとり説明を聞いてくださった。対外的な取り組みがラオスの国や民族を支える可能性を感じてもらえたことと思う。

障がい作業所ソンパオでは、この４年で積み重ねてきたミシンチームの力が発揮でき、さらに上手になりたい・新しいものを作りたいという意欲を刺激することができた。特に衣類の製作は着用した時にどのように見えるか、といった面白さがあるようだ。まだ未熟な部分はたくさんあるが、この積み重ねを続けていきたい。

障がいの有無に関わらず、良いもの作り必要とされる作業所を今後も目指していく。

（３）得られた教訓など：

国の体制が違うため、コロナ禍での活動制限の違いに苦労した。この状況下でも悲観的にならずに前向きなラオスの人々に支えられ、逆に勇気づけられることも多かった。一方でコロナ禍で観光客が来なくなり、村の中でも機織り機を開かなくなった家庭が増えたようだ。この苦境で伝統工芸が途絶えることがないよう、より一層気を引き締めて取り組みたいと感じた。この状況下でも助成を受け、活動の継続をさせて貰えたこと、本当に有り難かった。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

村も障がい作業所も次の仕事を常に待っており、技術の向上にも積極的であることから、引き続き彼女たちの成長を見守りながら新しいデザインを提案していく。次期は今年作れるようになったもののアレンジバージョン、難しい型に挑戦する。また、参加できる人数を増やせるように留意していく。

３．その他(エピソード・感想・写真など)

（１）活動中のエピソード・感想など

村では観光客がいなくなった結果、１枚の生地をかってもらう先がなくなった、あるいは金額が落ちた（材料費が出ているのかも不安）、といった声をたくさん聞いた。継続が難しくなり、機織りをやめた家庭も多いと聞く。そんな中で継続的に仕事がくる事を村の女性たちは心から喜んでくれ、私たちの視察に向けて見て欲しい製品をしっかりと準備して待っていてくれた。少数民族の村という事でコミュニケーションが完璧ではない中、できる限り歩み寄ろうと粘り強く聞き取りを実施してくれたラトサミーに心から感謝したい。

ラオスではその時々には採れる草木で糸や布を染める。こうして村と関わっていると「この時期はこの花が咲くよ」「この時期はこの実で染めるよ」と教えてくれ、たくさんのアイデアを与えてくれる。これが自然と生きるものづくりであり、ラオスの良さだなと感じる１年であった。

（２）活動の写真



（タイルー族の村 草木染め）



（タイルー族の村 染めた糸の様子）



(タイラー族の村 草木染め)



(タイラー族の村 染めた糸の様子)



(ヤオ族の村 刺繍のサイズを指定)



(ヤオ族の村 刺繍のサイズを指定)



(ヤオ族の村 刺繍の様子)



(ヤオ族の村 おばあちゃんの力作、刺繍)



(ヤオ族の村 サイズ指定した刺繍の仕上がり)



(障がい作業所で製品化した後)



(ヤオの刺繍を障がい作業所ソンプオでリボンバッグに) (リボンの設計など、作業所にとっても訓練に)



(レンテン族の村 調査)



(レンテン族の村 家族調査)



(レンテン族の村 藍染)



(レンテン族の村 刺繍)



(レンテン族の刺繍を 障がい作業所ソンパオでバッグに仕上げた様子)



(上記の刺繍、色違いバージョンの製作)



(うず柄刺繍、型違いを製作へ)



(赤のラオス展 御殿場 ラオス大使来訪)



(ラオス大使に製品をご紹介)

(3) JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

通常時、作業所の指導で手一杯なことが多く、少数民族女性のサポートには手が回っていなかった。今回助成を受ける事で、コロナ禍の厳しい状況下においても調査・交流を行い、民族女性たちが希望している事を汲み取ることができた。やはり実際に話してみないとわからないことが多いとわかり、私たちもPJを構築していく上で「受益者にとってどうか」を常に問いかける癖がついたように思う。依然、大変な状況は続いているが、この環境でやめる事なく続けることができれば、その後も技術は継承していけるのではないかと思う。遠隔での指導は続くが、次年度はより発展的な製品を作り、その技術を現地に残していけるよう尽力する。